



狂歌百鬼夜狂

全

狂歌百鬼夜狂

7利
2.833



明利 9
2833
本



序

心考 嗟あや—きさるん—あや—はぶされむた付
玉の文庫乃 仕物さう—もうや怪きと—んく怪

めは六部の地獄のさ—もまう—あ—ん
今女学者のあ—ゆと坊—の—ま
さき—りあや—ま—とあや—ま—ま—らで
あや—ら—とあや—むおれ月日の眼
風のいき雪のびんづ—雨れあ—海山
みけ—く—うね—あおつらのるもま—
ひらのさけ物—ま—ぬ—は—や—う—ま



乃やねおに百のあやまらふさうしねを
うらぶらぶらあつてくるあまの
みづきさくはらわらるるこのあま
鬼神ともうりりまらつて体まらる
あまのうらぶらとて富が園乃まら
深川のひらきまらとて火の池あら
あまの鬼一まらとていづる
のみまらとて物とねらとて
教百まらとてあまの根より
あまのまらとてあまのまら

まら

あまのまらとてあまのまら
あまのまらとてあまのまら
あまのまらとてあまのまら

あまのまらとて

あまのまらとて

あまのまらとて

あまのまらとて



百島の記

へき東に

これむう一物神ありあはむむげまらまきこをあり
四方大人の門はむむくいこれあむむ人まきこ
とらふ人おれ海の島まよきまらまのあむりこれむ
うしむおつーよのひも時くゆきこむむむむ
はむんあ月のこ日ばらうむいのここむきてほ
こむべうーあーまらむらむらむらむらむらむら
あけさせ箱根山ちるあむむけ遠まきみひつま
まむあやらむらむらむらむらむらむらむらむら
まらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

みはーとらふもさうらのけーまなりのさしーふとらふ
みありくーとちーいそれより家といふ播
安がう申しよあうーいそよんこぬさあめし
るの流し申しよあうーとちーいそあかあめく
せまきんをさういあひあくとぬ家のさぬり
うとあれゆる家のりそらうーいそりあせるよ
つおせしとらふいあうま松推は案かーをと柱て
正かーとあましーらふゆのまうーいそくよめり南
あめての雨戸はさうと外はぬいそてこあて燈ハ
いふらうのあうらうやとよのいそらうーいそらう

西條日記

さうとらふもさうらのけーまなりのさしーふとらふ
みありくーとちーいそれより家といふ播
安がう申しよあうーいそよんこぬさあめし
るの流し申しよあうーとちーいそあかあめく
せまきんをさういあひあくとぬ家のさぬり
うとあれゆる家のりそらうーいそりあせるよ
つおせしとらふいあうま松推は案かーをと柱て
正かーとあましーらふゆのまうーいそくよめり南
あめての雨戸はさうと外はぬいそてこあて燈ハ
いふらうのあうらうやとよのいそらうーいそらう

乃ちとおちあたまへよちいふ一しとびるまは
あつらうにりよくあてふいふよかりとせん出るる
うみあつたまはうまあつたまもあるべきとて
もあるまるととくしとてさうりあつらと
いまあつらうしとてさうりあつらうのあつら
今書の式をうきとてしけしう

百お清哉歌の式

一 交負百首出たの人教のつらはくしとて
あつらうよみたる人ありとも一度一首とて
席とまわりてあつらうまはる

百お清

一 小の金のまみは煙巻とまうくま紙のま
まうべし大きなるまら煙巻百はらとて
一首とまうく一冊とてうまへまら
一文巻ひら煙のたよとて紙料紙とて
紙巻ひらとてとてとてとてとてとて
かひとてうまへまら
一 花より小の金へうまら小煙巻とてまへまら
あつらひはあつらひのまらとてとてとてとて
しきとてとてとてとてとてとてとてとて
まらとてとて

一 吾等もく雑談多し是れもくは酒肴とま
くといへども言ふ盆をくくさるる

一 百首まあしりしる人の姓をけちまてく
さししあはまそ一まあうしそけあは
けんさしちさうよりあく踊るべき

一 妖怪は日出くのならくも寝まりよりく
卯のときあは退散をへーおあけむ披露
後日しるべし

右七箇条の題くくさるる一も遠肖の人
はさきくくは酒一斗連中へ出さべきあり也

天明五年乙巳十月十四日 催主 芝唐丸

大人は定まりと伴ひくあうておんてべき
両風のつよれむ陸をやおんていざやあり
ああるあといぶりしあよあま飯盛めり
いざいざおんてやとおおせいぐん寺とさる
までい人よおんてらくおんてしおんては
よりいざいざありあけつりのみはくく
しる人ありよもまおんていざいざあ
あくあけうておんていざいざいざ
形一者政令替りしもあはさびとあうて

してやまで門うちくまんとあぬり今うた人と
 定まらうとまじりぬのみありといふむむむむむ
 百鬼ありの家まじりぬむむむむむむむむむ
 うたむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 かきかきかきかきかきかきかきかきかきかき
 二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二
 ぬむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 かくかくかくかくかくかくかくかくかくかく
 例のころむむむむむむむむむむむむむむむ
 かきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

田舎歌

あんぱん〜と笑ふうてあむかけぬなの方
 ふをあの時こえととあれすめく松桂り
 ぬむむむ〜とあむむむむむむむむむむむ
 乃よとととととととととととととととととと
 しくむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 りよめ〜ととととととととととととととととと
 ちりあふ〜とととととととととととととととと
 むよのみよ〜とととととととととととととととと
 奥あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ
 ら〜とととととととととととととととととととと

ありしほどにうぬをあらうしむとまじりあは
 せしころはかたむすしねをあらみくらうく
 てせもはれをまつまじりふれぬ雨はとまにあぐ
 風つぐあつて吹るは雨にともひまうく鳴
 てもうく四鼓さつはまうとも鬼やともしほ
 へきりーきいあぐあひらうあぐにらりあつまり
 くふとめいしうとれともあぐらーにさひ
 ん地まぐりいどまをあらあつともあつはまいの
 奥のしゅうらうくと鈴のあつ音と人々あつた
 ししひよあがーにるあつはあつあつあつあつ

五七五

ありしほどにうぬをあらうしむとまじりあは
 せしころはかたむすしねをあらみくらうく
 てせもはれをまつまじりふれぬ雨はとまにあぐ
 風つぐあつて吹るは雨にともひまうく鳴
 てもうく四鼓さつはまうとも鬼やともしほ
 へきりーきいあぐあひらうあぐにらりあつまり
 くふとめいしうとれともあぐらーにさひ
 ん地まぐりいどまをあらあつともあつはまいの
 奥のしゅうらうくと鈴のあつ音と人々あつた
 ししひよあがーにるあつはあつあつあつあつ

とよきとて逃ぬるべきとてしきまおのけりまげ
あるやまひと人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ

百首

やうんといふあめあへて光とあつを申まけし
墨をこころのふくむとてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ
とよきとて人にもちむ筆きたのいとあや
なれどとて百首まみりてしきまおのけりまげ

いづるかきりうしれうに申きて九条はんおそし
きりしうましく海流ぐちあまのうと榎安が
口しちしとちちおししとちちのけしちち
いづるかきりうしれうに申きて九条はんおそし
きりしうましく海流ぐちあまのうと榎安が
口しちしとちちおししとちちのけしちち
いづるかきりうしれうに申きて九条はんおそし
きりしうましく海流ぐちあまのうと榎安が
口しちしとちちおししとちちのけしちち

夷歌百鬼夜狂

見越入る

へは、東也

さうさぬふ月もみむむととあふ那寺の松のみう入る

女

紀定麻呂

白粉よまきりてきりまき女いつれけちやれれあとなはれ

人魂

唐才系系

ちれやうぬ忘枕の雪のまよひううま世おたといなる

女の首

四才赤いん

人ま

首もろい出そ女の髪れもふよれむつあま家キチのきう

新魂病

宿をやり登

目のまじ二つの姿あふらふいあふも月れけのころ

うら髪

山東系傳

うら髪ふらふらうら髪あふまじりまひれ

山男

山男

うら髪てうら髪もまじり山男さす我名とよまじり

切赤丸

今田系傳

うら髪は廊下には切赤丸ひそく夢のまじり

毛髪

つむり光

毛髪の女の川柳とつむり光とつむり光

鬼

る場合

あふらふらふら鬼のまじり

山姥

大を裏伝

令平の母と山姥とあふらふら

逆ね

鹿津系傳

あふらふら逆ねとあふらふら

毛女郎

古師撥安

夜少の毛女郎とあふらふら

楠亡霊

同を酒和

楠亡霊のあふらふら

小神のま

高利刈り

小神うらまゝもふれぬ虫干しとてみざる質のみ売

魅鬼風

东作

ふじの吹とどーる朝瓦鬼もまらぬ天狗風も

せうけら

定麻呂

せうけら八真逢ふおちよ半きおと音庚申にゆり起は

殺せし名

ひる

むけのかいのおまほと狐いって梓并とておの系も

さしり

多し

そのおのこはさうて猿眼これやはさうとてさう

鬼女

赤い

内らの如救父のさひあうれてあやさあひけ

仲あち

あーあ

お神のあやうあやうお神のまらとまらるあん

と目入る

系傳

日月さくしお服のみつあねおひらうお早ぬいじり

片輪車

东作

とびくちきまらうらうらく引汐のうら車もこま

古寺

うら

燈籠のきくうらおはまの緒のうらるもまら雨の

天井のこ

ちやうち

三浦屋の格天井と名よしくとんじり物と云

けいせ

船通員

ちやうち

面よりまき海をよきうほひあみ申すまにといふ出

蟹中員

掻安

借舫ハ仕物よりおそろしき強佐佐の蟹を以て

大蟹が時

船通員

抽とてまき大蟹が時とてうーらる強まよきといふ月

さといふけ

東作

らまはるまき月老女のけいけいといふをいふまのといふ

ト

びくれ小僧

定麻呂

しちねよきからおんじり物と云

ちやうち

京付

らみつおやらの風の音つれは証りりひの目と云

姥火

まき歌

姥火おそれて年やうらふんをのびあご腰は

牛鬼

まよ糸

かしくとらまき周縁と牛鬼のよきといふといふ

肉吸

光

傘のあご骨の強くとあごまきの板の嵐や

死めく板

かんこ

けんとをきくとまゝある古板これやちの二里塚も

猪熊

光

ま摺さへて穴くらのちりつと目しそくし書猪熊

戸がくし

飯成五

これかちのまゝ鬼やう紅きやうあまや酒のまゝの心

かごう摺

東作

しんやま柳のうらうらうまをさうくもまかごう摺

古戦場

系信

しそ武者のまゝや酒の古戦場血烟あてま書ひまじ

古徳

吉野

ある時の女帝ともまうて古徳のりくくと人とまひやる成

安達系

怪安

妖怪とこれやいん鬼やうれあじらかまよてる姿ハ

猫ま

沼船

祈こまゝの姿とみりままひくうこちまれおひのおどろ

海坊主

赤ら

湯浅とらいても深い海坊主成佛してやうみづん

かのけ

系和

かのけに葵の上のまゝあんか茂の車のあまののち

骸骨

东化

あやめくぐ鳥のちぢる泣かれむ何ゆきさうも苗芽
あやめくぐ

羅生門

定齋

井戸うささあやめるさうういさうまもはまの網とく

一ツ目小僧

ひる

雨ちりちり出する二ツ目の小僧くくう首むく目んを

化おや一き

裏住

これまらのあての程さうさうさうにさや一きお大の世

うづち

こんこ

子ととせて石を抱さるうぶ女とてうささなむおひあさる

ハ

実方雀

糸侍

うらちうらちのひらく小焼をい実方さうあけけし

大あしむ

め一盛

大あしむこれかたの魚あれやうれをさうとあまがき

火車

高巻

迹を辿る火車ふとく世とさのれ飛や役とさく

一寸法師

かき安

ちか力の一寸法師に持人うらち一とあけのひらき

生霊

沼船

おぢある狗おし訂とされとさよきゆいこい

く

死霊

搔安

いつまでもさびびるうみまき川のあやううる流は灌頂

大入夜

ひる

その心も大廣神の入るう名ふらおはるなまふま風

四隅小僧

やーあり

基ふあけ月のあきみのなけ小僧どうもあひあ

え魚一寺

東作

きふく今うーくあう坂やいふまどうもあひあのかんじ

化地翁

山正麻呂

あやみとさる地ふら六たの能化のやふらあひあ

松江

系和

あーくとおとまおれは火も消ぐ松とあひあ

迷いの令

赤良

みま人の迷いのいひあうらどーいふのつるあひあ

光地

系傳

あやうまの吹くるやみのま光地とあひあ

轆轤首

高嘉

窓の戸のそまの信やあうら首あひあ

大神

河守

あやうれと位つまあー大神いふも人とあやま

のろくろ

ヤ成

ちよーのろくろ

層氣樓

东化

ちまぐろの柱やよせて

幽霊

定麻

年もまじらばよせに幽霊を腰より下れ

ま女身

搔安

物をさし風や糸の古御下よせ

ま路鳥

京傳

まらへぬ松ふしへ

+

越中立山

ひる

魂返と薬の出るま

狸

糸和

冬うれて暮る形へ

蛇鬼

志願

まらりうくありて

逆幽霊

洒船

幽霊もまの山

姥

东化

さるり子尾くち

とらの時

八幡ちりび

多和

このあつりふさびふちうまら八幡の森つりてなれ

四を羨

光

ひくちうちうよもあけてせつらつらふいとよよ四の教

古橋

定麻呂

風あけむさめれと首さる榎をさましうふきておそし

雨降小僧

や盛

さびてゆくあづきの雨のうらうらあつむ眼を盆のこ

ちり女

まづら

大うこのおそしるうら甘果まきうらうらるるちり女

あや

光

あつてうらうらうらあやうらうらあやうらうらあやうらうら

あや兒

東伝

あやうらうらあやうらうらあやうらうらあやうらうら

天狗

播安

あやうらうらあやうらうらあやうらうらあやうらうら

文福茶釜

泥女

文福の茶釜金小をけなうらうらうらうらうらうら

生贖

まゝ

あや寺

これやこの後為井のみじりけあやうらうらうらうら

芭蕉の精

定齋

物とじま形とみどるをせはさるゝあまきんていせぬ

大彦良

ひる

牙のいけしきま利きのたはの坊合はてれおら

祈あら

高彦

えようてうくばひりりと祈あらあやしく肝とけづる

古井戸

赤ん

つ井つわづの中あつひのたの羊やあひまら

さ砂松

浜の

狸ふあなわづの座うてまのまほは化

合

つや

まのたのまみやげを合しよとまぬけはる根山

跋

花海中入く蛤と化すは〜と
むけきむらぎ免き子とむけ花姫姑と
化すハ其の化すは〜と南瓜唐瓜子と
化すハ其も田吹と化すも〜と山〜乃
化すハ其の化すは〜と俳人ハ其も〜と詩人
又人〜人〜と印〜と招き呼と化す音
電光の〜と〜と天狗の〜と〜と化
そのに出合ふ子と直り勇氣も〜とけ嬰嬰
が〜もあまぬ方〜と四角ある鳥〜と丸く

角ちしは路乃角ちしきとせれよく脈とて
くつくつししむいふを左の位に腹つみ
うらうらふ若根よりさきこの目出しさ
は括ちくぢやひる夕暮のきみとうくせ
ちししの体さあぬあぬるあぢ力
あさらしのあうくささけもあまはま
の位あめうつしむ路おねあの百物
けうしきうきうきく一舟とありしれあま
さあは括ちくしむしむよまうの位あめ
首領四方名しきささぢちらうりん

ナ
十

うられ

くつくつししむいふを左の位に腹つみ
うらうらふ若根よりさきこの目出しさ

子代のさうさ

うらうら入道

唐衣橋海

此の書は、新板の諸品、追々出来
上り、其の由、此の書に候

と

江戸通油町

書林

葛屋重三郎



龍爪園玉卷